

館報 教育記念館



常設展示室紹介

再発見 とやまのひとづくり

ふるさとの優れた先人に会える 3F 郷土先賢室



知っている先人はいるかな？
どんなことをして、どんな生
き方をしたのかな？



今まで展示した先人157名の情報をカードにして提供しています。
ホームページでもご覧いただけます。

前号は2Fを紹介。この号では3Fを紹介します。

主な内容

- ◎教育時評 富山県小学校長会 会長 豊田 高久 2
- ◎第33回 郷土の先賢顕彰者紹介
 - 南 桂子 3
 - 江尻 豊治 4
 - 宮武 英男 5
- ◎「きらめき未来塾」 右脳活用道場 お笑い道場 思考道場 6
- ◎恒例展 「第21回さんすうワールド展」
- ◎これからの展示等の予定



発行所／公益財団法人 富山県ひとづくり財団 富山県教育記念館 〒930-0018 富山市千歳町 1-5-1
 TEL (076) 444-2000 FAX (076) 444-2001 E-mail: toyama@t-hito.or.jp https://www.t-hito.or.jp
 (教育記念館会議室ご利用の場合 ☎ (076) 433-2770)
 発行人／富山県教育記念館 館長 富田 利通 印刷所／いおざき印刷株式会社



現在・過去・未来

富山県小学校長会

会長 豊田 高久

9月初旬に、「こんにちは母さん」という映画を観ました。この数日前に主演の吉永小百合さんがテレビのインタビューで、息子役である大泉洋さんの幼い頃の写真を取り寄せたという話を聴いて、映画を観てみたいと思ったのです。吉永さんは、写真を通して大泉さんの過去を少しでも知ることで、息子とともに人生を歩んできた母親役を演じたいと考えられたそうです。

映画を観ながら、学級担任をしていた頃に先輩から言われた言葉を思い出しました。それは、「目の前の子供だけではなく、生まれてから今日までの成長、そして、そこにまつわる家族の思いなどを想像しながら、さらには、子供の未来の姿を想像することで、今やるべきことが見えてくる」というものでした。学級担任には、現在を見るだけでなく、子供の過去や未来を想像する力が求められるのだと、やりがいを感じるとともに、仕事の奥深さに身の引き締まる思いがしました。

映画のワンシーンに吉永さんが取り寄せた写真が登場し、それを見ながら会話する吉永さんと大泉さんは、本当の親子のように見えました。この二人にはともに歩んだ過去と現在があるばかりでなく、これからもともに生きる未来があるようにさえ感じられました。

ところで、吉永さんはインタビューで次のようなことも話しておられました。「自分が主演になった若い頃の映画を観て、今の自分を鼓舞

して、あの演技を越えたいと思っているが、なかなか越えることはできない」と。ただ、私には、人情味あふれる東京下町の足袋屋のお母さんを演じる吉永さんの姿は、とても新鮮で羨ましいほどに明るく輝いて見えました。

そしてまた、若い頃、研究授業後に校長先生に言われたことを思い出しました。「君はこれから長い教師人生を送ると思うが、今日を越える授業は、そうはできないだろう」と。褒め言葉のような不思議な言葉でした。私は、そんなはずはないと思いました。経験を重ねれば、今日のような拙い授業ではなく、もっともっといい授業ができるはずだと。担任生活を終える頃に、あのときの言葉は、本当だったと思いました。あのときのように若いエネルギーにあふれ、澄み切ったように純粋な授業は、あれ以来、できなかったのかもしれないと。吉永さんの演技と自分の授業を比べるのは失礼極まりありませんが、あのときの校長先生には、吉永さんと同じものが見えていたのかもしれない。

しかし、過去の自分を越えようとしている吉永さんの輝くような演技を観ながら、新たな思いも湧いてきました。今、自分に与えられた役割に全身全霊をこめ、目の前の子どもたちの現在を見つめ、過去と未来を想像しながら、純粋な心で臨むことが、あのときの自分に近づくことだと。そんな思いを強くして、映画館を後にしました。

第33回 郷土の先賢顕彰者紹介

3階 郷土先賢室



詩情あふれる世界を表現した 世界的銅版画家

みなみ けいこ
南 桂子 (1911~2004)

南桂子は、明治44年(1911)2月12日、富山県射水郡下関村(現高岡市中川)の大地主の三女として生まれた。幼少期に両親を亡くし、親族によって育てられた。昭和3年(1928)、富山県立高岡高等女学校(旧富山県立高岡西高校・現富山県立高岡高校)を卒業。同年5月に行われた開校20周年記念展覧会に卒業生として油彩画を出品した。女学校在学中から絵画制作への興味が膨らんでいたことがうかがえる。

昭和20年(1945)、芸術への思いから家族とともに上京。すぐに女流画家の集まりである「朱葉会」に入会した。その後「自由美術家協会」の洋画家、森芳雄に油絵を学ぶようになった。また、新聞に童話を投稿するなど芸術作品を通して自立して生活しようと模索した時期でもあった。昭和24年(1949)、第13回自由美術展に油彩画「抒情詩」を出品。その後、のちに夫となる版画家の浜口陽三と出会った。浜口の影響を受け、昭和28年の自由美術展には最も早い時期の銅版画「目を奪られた女(めをとられた女?)」「幻想」を出品した。

昭和29年(1954)にフランスに渡り、陽三と暮らした。40歳を過ぎてから銅版画の世界に魅せられ、版画家ジョニー・フリードランドの版画研究所で銅版画を精力的に学んだ。この頃の作品には、女性・魚・きつね・鳥などのモチーフが見られ、昭和31年(1956)には、「風景」という作品がフランス国民教育省に買い上げられるなど、海外で認められるようになった。さらに、「羊飼いの少女」がニューヨーク近代美術館のクリスマスカードに、「平和の木」がユニセフのグリーティングカードに、「子供と花束と犬」がユニセフのカレンダーに採用され、海外での評価をさらに高めた。南の作品はパリの画廊のカタログにミロやピカソと並んで掲載されるまでになった。この頃のモチーフは、少女・鳥・お城などが多く、線が細かく表現され、構図が洗練され、南らしい独自の世界がこの頃から生まれている。

昭和40年代、その繊細な色遣いや見方によって様々なことを想像できる南の作品は、日本でも高く評価され、多くの雑誌の特集や表紙を飾った。昭和45年(1970)に出版された谷川俊太郎の詩集「うつむく青年」では、ペン画による挿絵や装画を手がけた。

昭和57年(1982)、パリを離れサンフランシスコに転居。70歳を超えていたが作品制作を続けた。同年には東京の帝国ホテルの全客室に南の銅版画が飾られ、また、同ホテルの情報誌の創刊号から13号まで連続してその作品が表紙を飾った。平成8年(1996)に日本に帰国。同10年(1998)、「ミュゼ浜口陽三・ヤマサコレクション」が開館し、南の作品が所蔵された。高岡市美術館、富山県美術館、黒部市美術館をはじめ国内に所蔵館は複数ある。平成16年(2004)、都内で死去。晩年、「女学校に通う道すがら、毎日見ていた川の水面がキラキラと光って綺麗だったのを覚えている」と故郷を振り返っている。93歳であった。

<専門員 星野 貴昭>



浜口陽三と南桂子 パリのアトリエにて 1978年



「羊飼いの少女」



「子供と花束と犬」

協力：ミュゼ浜口陽三・ヤマサコレクション



越中おわら節の歌い方を創り上げた名人

えじり とよじ 江尻 豊治 (1890~1958)

江尻豊治は明治23年（1890）9月28日、八尾町東町で父 江尻半兵衛、母 みつの三男として生まれた。半兵衛は八尾でも知られた浄瑠璃の語り手であり、明治の初めに古い越中おわら節の原型をまとめたと言われる。また、叔父の与三吉は三味線の名手、その妻せき子は踊り達人であった。

豊治は尋常高等小学校を卒業後、八尾町西町の鍛冶屋に見習い奉公した。明治44年（1911）、豊治は進行性色弱による失明の恐れがあったため大阪へ出て鍼灸術を習うことになった。その修行中、芸能好きが高じ、大正4年（1915）から6年までの2年間、文楽の竹本南部太夫に弟子入りして義太夫を習った。そのとき師匠から「節回して文句を生かさにならんぞ」と言われたことが豊治の歌い方の基本になった。そして、大正4年には京都の東洋蓄音機株式会社（オリエントレコード）にて「越中おわら節」のレコード吹き込み第1号として参加している。それが、豊治が持ち前のきれいな高音で喉を振るわせ、「越中おわら節」の魅力を全国に広めた最初であった。

大正8年（1919）、大阪から帰郷。義太夫や都々逸、小唄等に加え、三味線・胡弓・太鼓といった囃子も堪能であった豊治は、おわらの歌い方を引き続き研究し、高く繊細な調子で情感を込め、ゆっくりとしたテンポで、上の句の七七と下の句の七五をそれぞれ一息で歌いきる歌い方を創り上げた。この豊治の歌い方が今日、八尾で歌われている「正調 越中おわら節」になっている。ただし、この歌い方は高音の発声が非常に難しく、歌い手は今でも難儀しながら歌っている。

大正10年（1921）5月、東京神田の青年会館で第1回全国民謡大会が開催され、豊治も出演した。翌年の第2回大会では、豊治は出演しなかったが、越中おわら節が江差追分を抜いて日本一に輝いた。

昭和4年（1929）5月、翌月に東京三越デパートで開催される「富山物産展」に「越中おわら節」が出演するにあたり、新しい振り付けの踊りを作るために八尾に新進舞踊家の初代 若柳吉三郎が招かれた。若柳が、現在も踊られている、その新しい振り付けを考案する際、豊治は求めに応じて何度も「越中おわら節」を歌った。そして6月、東京で、若柳の新しい振り付け（踊り）、歌人の小杉放庵がつくった「ゆらぐつり橋手に手を取りてわたる井田川 おわら春の風」の新しい歌詞が、豊治の歌にのせて披露され、ここに現在まで引き継がれる「越中おわら節」のスタイルが創り上げられた。その後も新しい歌詞を積極的に取り入れながら「越中おわら節」は進化を続けていった。

昭和22年（1947）、豊治は、昭和天皇の富山巡幸の時に、県庁前広場で天皇の前で「越中おわら節」を歌い上げた。また、昭和27年（1952）・28年の全国民謡舞踊大会では2年続けて優勝に導いている。

昭和33年（1958）6月16日死去。時には表に立ち、時には裏方へ回り「越中おわら節」の確立と発展に力を注いだ生涯であった。享年68歳。

＜専門員 松井 功一＞



浄瑠璃修行（大阪）時代の豊治



レコーディング風景（左から二人目が豊治）



甲子園に「しんきろう旋風」を 巻き起こした名監督

みやたけ ひでお
宮武 英男 (1908~1990)

宮武英男は、明治41年（1908）に福井県敦賀市に生まれた。旧制早稲田中学校、そして明治大学野球部のショートとして活躍した。昭和3年（1928）大学卒業後は、満州の野球の名門である「大連実業団」に入団し、8年間正選手を務めた。昭和11年（1936）に大連実業団を退団。現役を引退した。その後、戦争が激化し、日本は終戦を迎えた。運送関係の会社に勤めていた英男はソ連（旧ロシア）の満州侵攻により、シベリアに抑留された。

昭和23年（1948）に帰国。敦賀市の両親はすでに他界しており、妻の静枝の実家である魚津市北山に転居することになった。同年、大連実業団で活躍した経歴から、魚津東部中学校のコーチに就任し、中学生を熱心に指導した。昭和26年（1951）に魚津高等学校の野球部監督に就任し、教員ではない初の野球部専任監督となった。

英男は、勝つことだけに重点を置く当時の高校野球を批判し、野球の技術指導だけでなく、礼儀や生活態度、勉強にも厳しかった。妻と魚津高等学校の売店を経営していたこともあり、寝る時間以外は、一日中、学校で働いた。厳しい反面、人間的には優しく、誠実で温かい人柄であった英男は、オヤジさんの愛称で慕われ、部員だけでなく校内の生徒にも広く目を向け、相談にもよく乗った。

監督就任3年目の昭和29年（1954）に、魚津高等学校野球部は、春の県大会で初優勝をし、その2年後の昭和31年（1956）に春の北信越大会で初優勝をした。監督就任5年目であった。さらに、同年、日大三高（東京）等、甲子園の常連校を魚津市に招き、魚津市内の野球レベルの向上に努めた。そんな矢先、同年9月に魚津大火が起こる。市内の1,469戸が焼失し、7,291人が被災するという大惨事となった。焼け出された部員に、他の部員が野球道具を貸すなどチームの結束力で大火を乗り越えた。

昭和33年（1958）、魚津高等学校は初めて甲子園に出場した。次々に強豪校を下し、甲子園に「しんきろう旋風」を巻き起こした。準々決勝では、後にプロ野球選手となる板東英二投手を擁する徳島商業高等学校と対戦し、「0対0」の18回延長再試合となり、球史に残る名勝負となった。この試合が名勝負として語り継がれているのは、失策0という魚津の再三の美技が試合を引き締めたことや村椿投手が回が終わるたびに球をプレートにきちんと置いてくるなど、魚津高等学校のマナーの良さが全国から賞賛され、精神野球に力を入れる宮武イズムが垣間見られたことにあった。魚津高等学校の甲子園での活躍は、大火からの復興に苦闘する魚津市民への何よりの激励となった。また、雪国に野球は育たないというジンクスを見事に破って見せた活躍となった。

英男が魚津高等学校野球部監督を務めて12年。甲子園出場2回、春夏秋を通じて県大会優勝9回、北信越大会優勝1回等、輝かしい戦績を残し、昭和38年（1963）に監督を退任した。その後も魚津市総合体育館の指導員等を務めながら、少年野球の指導を行った。「子供たちに甲子園への夢をもたせたい。体の続く限り続けたい」と野球への情熱を生涯もち続け、平成2年（1990）82歳で他界。宮武監督率いる魚津高等学校が甲子園で巻き起こした「しんきろう旋風」は、今もなお、甲子園の球史に輝き続けている。

<専門員 飛弾 英樹>



練習の様子を見守る宮武監督（写真左）



帰郷した魚津ナインを熱狂的に歓迎する魚津市民

きらめき未来塾（夏休み期間中）

子供たちの創造力や表現力、柔らかな思考力を養うことをねらいに、今年も3つの道場を開催しました。参加した子供たちは、講師の先生方に教えてもらいながら、チャレンジし、試行錯誤を重ね、大いに活動を楽しみました。今年度は耐震改修工事のため、高志会館や県民会館で開催しました。

☆右脳活用道場

講師 森 みちこ（漫画家）



～漫画原稿の制作（高志会館・県民会館）～

☆お笑い道場

講師 安野家仁楽斎（社会人落語家）



～お笑い大会（高志会館）～

☆思考道場

講師 小澤愛実 小里卓己 中田裕大 南佳織
杉本拓武（以上5名 県内小学校教員）



～「ドット」でお絵かき（県民会館）～

恒例展 第21回「さんすうワールド展」 7月21日(金)～8月20日(日)

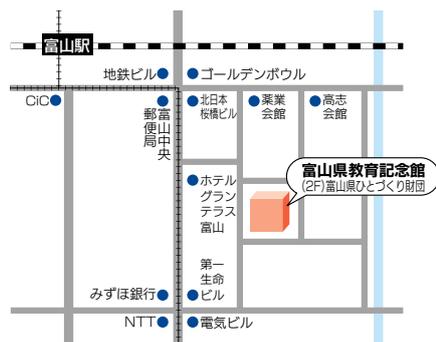


～（教育記念館 小ギャラリーにて）～

これからの展示等の予定

- ◆児童・生徒によるものづくり展
- ◆富山県造形教育作品展
- ◆アイデアロボット展
・高校生ロボコンフェスタ
- ◆ロボットづくり教室
- ◆富山県中学校美術展
- ◆子どもの目、自然不思議発見写真展

- 10月18日(水)～11月12日(日)
- 11月18日(土)～12月3日(金)
- 12月9日(土)～1月7日(日)
- 12月10日(日) ※県民会館で
- 1月7日(日)
- 1月19日(金)～2月4日(日)
- 2月9日(金)～3月10日(日)



公式X (旧Twitter)

https://twitter.com/t_hitozukuri

財団の取組みや富山県教育記念館の展示情報を掲載しています。ぜひ、フォローをお願いします。



教育記念館HP

<https://www.t-hito.or.jp/>

随時更新しています。



あ・と・が・き

10月から展示が再開しました。この館報がお手元に届く頃には、多くの子供たちによる作品展が開かれています。

同じ材料から、多彩な造形作品が生まれています。一人一人の個性が発揮された作品を是非ご覧ください。